

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	張 洵
論文題目	江戸後期の職業詩人研究——大窪詩仏を中心として——
審査要旨	<p>本論文は、江戸時代の後期、とくに寛政～文化・文政年間に至る間（1789-1829）の、漢詩創作をめぐる質量いずれもの著しい変化に着目し、その要因を「職業詩人の興起と活躍」という視点から解析しようと試みた意欲的な論文である。なかでも、この時期にもっとも活発な諸活動を展開した江湖詩社に注目し、その代表詩人の一人である大窪詩仏に焦点を当てて、関連の諸問題を考察する。</p> <p>大窪詩仏に代表される、江戸後期職業詩人の独自性を明確にするために、本論文ではほぼ全章にわたって、二つの包括的な視座が用意されている。一つは、彼らの前と後とで何がどう変化したのかという、日本漢詩史における比較の視座である。もう一つは、中国詩歌史に照らして、彼らの諸活動を日中の文化比較の立場から定位させるという視座である。前者は日本漢詩史における彼らの存在意義を問うための視座であり、後者は「漢詩」という外来文体が不可避免的に要請する視座といってもよい。</p> <p>本論文は、序章を除き、「職業詩人の誕生」、「職業詩人のリーダーと成員構成」、「職業詩人活躍の場」、「職業詩人の詩風変革」、「大窪詩仏の詩」という五部によって構成され、それぞれに複数の章が含まれ、本論12章、序章を加えれば、計13の章からなる。</p> <p>まず、序章において、「職業詩人」は「原則として、他に確たる正業をもたず、己の製作した詩を売ったり、詩評を書いたり、詩の作法を教授したりすることで、生計を立てた詩人」であるという概念規定がなされた上で、先行研究の不足点が述べられ、本論文の意義と独自性が示される。</p> <p>第Ⅰ部の「職業詩人の誕生」は、3つの章からなる。第一章「職業詩人の誕生」では、なぜ江戸時代の後期に職業詩人が誕生したのかという問題が通時的に考察される。江戸幕府によって儒学重視の姿勢が打ち出されたことによって、民間でも儒学が講じられるようになり、それに付随して漢詩文も作られ始めるが、漢詩はあくまで儒学の従属的地位に置かれたため、自由な発展は阻害された。そこに楔を打ち込んだのが荻生徂徠である。彼の主張により、詩文学習の重要性が広く認知されるようになり、それが創作人口の拡大を生み、やがて儒学から独立分離して詩文創作に専ら勤しむ専門文人が誕生するようになった。さらに市民経済の発展と相俟って、そのなかから職業詩人が生まれ、彼らの活躍によって、江戸後期に漢詩文創作が一気に通俗化する、と分析する。第二章「職業詩人の生き方」では、彼らの生活手段が論じられる。詩文の作法を教授して得られる束修、パトロンの支援、詩文書画の謝礼、無心の旅、出版活動等が彼らの主たる収入源となったことが具体的に紹介され、あわせて中国明清の職業文人との類似性が指摘されている。第三章「大窪詩仏の出版活動とその特徴」では、江戸後期に自作詩集の刊行に対する姿勢に大きな変化が見られ、生前の刊行が一気に活性化したこと、その中心に詩仏を始めとする職業詩人の存在があったことが指摘されている。民間の職業詩人にとって、己の詩集のみならず、多種多様な選本を編纂刊行してゆくことが、己の生計を助ける重要な手段となったことなどが、具体例をもって解明されている。</p> <p>第Ⅱ部の「職業詩人のリーダーと成員構成」は、2つの章からなる。第Ⅱ部では、大窪詩仏が職業詩人としての道を歩み始める契機を作った、二人の師について論じている。第四章「市河寛斎詩中の「江湖」と江湖詩社」では、詩仏を詩人として独り立ちさせた江湖詩社という場を創設した、市河寛斎に焦点を当て、彼がなぜ詩社を結び、「江湖」の名を冠したのか、という問題を中心に考察する。第五章「山本北山及び奚疑塾の人たち」では、もう一人の師、山本北山の人となりと彼の私塾の特徴を中心に論</p>

じ、北山と彼の塾が詩仏に与えた影響を論ずる。

第Ⅲ部「職業詩人活躍の場」は3つの章からなり、第六章「日中の民間詩社概説」では、中国における民間の詩社について概説した後、日本の江戸時代における詩社の活動を前・中期と後期とに分け概説する。その上で、江戸後期の詩社が中国にも見られない独自の発展を遂げていることを指摘する。第七章「化政期の詩会と出版」、第八章「江戸時代の書画会」の2章は、第六章で抽出された江戸後期の詩会に特徴的な活動を、より具体的な現象に着目して分析する。第七章では、印刷された「人名録」と「課題表」を採り上げ、第八章ではイベント化した大規模な「書画会」を採り上げ、それぞれ漢詩文や書画が市民生活に浸透し通俗化してゆく瞬間をとらえている。そして、そこでも職業詩人たちが中心的な役割を果たしたことを詳細な資料を駆使して指摘する。

第Ⅳ部「職業詩人の詩風改革」は2つの章からなる。天明・寛政以降の詩風変革は荻生徂徠の主張に反旗を翻すことよって開始されるが、第九章「山本北山・大窪詩仏の反古文辞派」では、その理論的主導者であった山本北山の詩論を再検討し、彼の主張が徂徠のそれよりも文学本位により近く、儒学からの開放を一層促進し、それが漢詩創作の市民階層への浸透を加速させたと分析する。詩仏は、北山の理論を漢詩創作の実践を通じて具体化し、反古文辞の流れをより強固なものにした、と結論する。第十章「大窪詩仏と唐宋詩歌論争」では、文化十年（1813）の刊、巻大任の編『宋百家絶句』に寄せられた6名の手になる序文を採り上げ、6人の間で展開された唐宋詩論争について論じている。文化年間にまでなると、交友関係のある詩人間においても多様な詩歌観が混在し、それらが水と油のように相対立するばかりではなく、相互に歩み寄りを見せる傾向があったことを、六篇の序文を丁寧に検討して、これまで気づかれずにきた点を指摘する。

第Ⅴ部「大窪詩仏の詩」は2つの章からなり、詩仏の詩のなかから、特徴的な二種類の作品群が選ばれ、具体的に論じられている。第十一章「大窪詩仏の「村居四時雑題十九首」」では、初期に詩仏が多作した田園詩が採り上げられ、江湖詩社が範と仰いだ南宋詩人の田園詩（范成大「四時田園雜興」）との比較が試みられている。第十二章「大窪詩仏の詠物詩」では、中年以降多作され始める詠物詩が採り上げられ、詩仏が元明清三家の詠物詩を学習していたことが指摘され、彼の詩作のモデルが宋詩のみでなく、元明清三代の詩をも学習対象とし、さらにはほぼ同時代の清代中期の詩作や詩論にも十分な関心を寄せていたことが指摘される。

本論文の最も優れる点は、「職業詩人」という社会的身分に焦点を当て、それを基軸に江戸後期の詩風変革を解析したところにある。それによって、江戸後期のみならず、日本漢詩史全体の変化の跡や原因がきわめて明晰になった。加えて、江戸時代全体ならびに中国近世の詩歌史を視野に入れつつ、比較詩学的な観点を確保している点が、論文のスケールを大きいものにしている。その分、やや荒削りな部分が残ることは否めないが、それを補って余りある多くの新しい観点を発掘し、日本の漢詩研究において新しい局面を切り拓いた極めて優れた論文だと審査員全員が一致して高く評価した。よって、本学において博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。

公開審査会開催日	2014年 3 月 26 日		
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		稲畑 耕一郎
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	池澤 一郎
審査委員	早稲田大学教育・総合科学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	内山 精也